

『浪華百人一首忘貝』紹介

菊池真一

「日本古典籍総合目録」によれば、『浪華百人一首忘貝』は大阪市立中央図書館に嘉永三年本があるのみである。筆者は『浪華百人一首忘貝』明治二十四年本二種類を入手したので、紹介したい。

いずれも大本であるが、嘉永三年本と明治二十四年本とは全く別版であり、明治二十四年本二種も内容が異なる。

以下、それぞれの内容概略を紹介する。

一、嘉永三年刊『浪華百人一首忘貝』

全五十三丁で、内容は次のとおり。

口絵（明治版と異なる）

摂州住吉社図

百人一首（五十丁）

百人一首よみくせ伝

男女相性事

五性相生名頭字・十二月異名略

六十図

百人一首の上部には次の記述がある。

和歌三神図

紫式部

小野小町

西行法師

津守国基

勾当内侍

袈裟御前

奈良左近が妹

伊賀局

常盤御前

遊女室君

曲水之宴

諸職八景狂歌（米屋夜雨・笠屋秋内・笛屋晴嵐・塩屋暮雪・表具屋帰帆・両替

屋晚鐘・紅粉屋夕照・烏帽子屋落馬）

婚礼仕用の次第

七夕新歌つくし

（楽器）

世話いろは新絵解

三十六歌仙（明治版と異なる）

刊記

嘉永三庚戌歳

初春再刻

諸国発行書林

土州高知 田村屋源右衛門
同 瀬戸屋才助
播州姫路 隅屋紀右衛門
同 灰屋輔二
備前岡山 中嶋屋益吉
備中倉敷 太田屋六蔵
筑前博多 多飛屋治助
江戸 山城屋佐兵衛
同 須原屋茂兵衛
大阪 秋田屋太右衛門

二、明治二十四年刊『浪華百人一首忘貝』(甲本)

甲本は全九十丁。内容は次のとおり。

口絵(浪華住吉の浦汐干狩の図)

貝桶之図

百人一首(一丁～五十丁の下三分の二ほどに。)

一丁～五十丁の上三分の一ほどには次のものが記されている。

三十六歌仙(一丁～六丁)

琴の事(七丁オ)

双六の事(七丁ウ)

三味線の事(七丁ウ)

三味線の図(八丁オ)

鏡の由来(八丁ウ～十丁オ)

御伽這子・犬張子・守刀の図(十丁オ)

卒塔婆小町(十丁ウ)

卒塔婆小町図(十一丁オ)

橘媛(十一丁ウ)

橘媛図(十二丁オ)

産前後身持心得(十二丁ウ～十四丁オ)

妊婦図(十三丁オ)

産前よき食物(十四丁ウ)

同禁もつ(十四丁ウ)

赤子図(十五丁オ)

産後よき食物(十五丁ウ)

禁物(十五丁ウ)

忌もの(十五丁ウ)

産家の心得(十五丁ウ～十六丁ウ)

人間生涯の祝義(十七丁オ・ウ)

袴着図(十八丁オ)

年中祝ひ日之事(十八丁ウ～廿七丁ウ。この間、八図あり。)

二十四孝絵抄(廿八丁オ～四十三丁ウ。この間、八図あり。)

衣類たちぬひ指南(四十四丁オ～四十五丁オ。)

仕立図(四十五丁オ後半～四十五丁ウ)

万染物しやう(四十六丁オ～四十九丁オ。この間、一図あり。)

衣服たつ心得(四十九丁ウ～五十丁ウ)

女大学(大壺丁～大卅六尾丁の下三分の二ほどに。)

大壺丁～大卅六尾丁の上三分の一ほどには、次のものが記されている。

女大学説明及び図(大壺丁オ)

今川になぞらへて自らをいましむ制詞の条々(大壺丁ウ～大九丁オ。この間、四図あり。)

四図あり。)

女手習教訓状(大九丁ウ後半～大十四丁ウ。この間、四図あり。)

都路往来(大十五丁オ～大十八丁ウ。この間、二図あり。)

以呂波三体(大十九丁オ)

いろは説明及び図（大十九丁ウ）

書初詩歌（大二十丁オ・ウ）

七夕詩歌（大廿一丁オ・ウ）

四季の文（大廿二丁オ・大廿九丁オ。この間、四図あり。）

齒黒のふみ（大廿九丁ウ）

婚礼の文（大三十オ）

文書やうの事（大三十ウ・大卅一オ。この間、一図あり。）

小笠原流折形之図（大卅一ウ・大卅三オ）

女中名頭字（大卅三ウ・大卅四ウ）

大日本国尽（大卅四ウ・大卅六尾ウ）

占図（糸百一丁オ）

即座占（糸百一丁ウの上三分の一ほど。下三分の二は図。）

夢うらなひ（糸百二丁オ・ウの下三分の二ほど。）

衣服裁物仕やう（糸百二丁オ・ウの上三分の一ほど。）

小笠原折形之図（真終五十一丁オの下三分の二ほど。）

衣服たち縫に忌日（真終五十一丁オの上三分の一ほど。）

翁嫗図（真終五十一丁ウ）

十二月異名（奥付）

刊記

刊記は次のとおり。

明治廿四年二月十五日印刷

同 年二月十六日出版

発行者 大阪市南区順慶町通四丁目百七十九番屋敷 此村庄助

著作者 大阪市南区順慶町通三丁目百四十六番屋敷 伊沢駒吉

印刷者 大阪市西区阿波座中通二丁目五十番屋敷 高峰虎二郎

売捌所 大阪心斎橋通順慶町北へ入六軒目 此村欽英堂

三、明治二十四年刊『浪華百人一首忘貝』乙本

乙本も全九十丁。女大学が前で、百人一首が後となっている。百人一首の上部は甲本と同じだが、女大学の上部は次のとおり。

本朝女二十四孝

小笠原折形之図

衣服裁もの、秘伝

万しみの落秘伝

口絵と貝桶之図は甲本と同じだが、女大学の前に

婚礼の式

結納の事

がある。

百人一首の後には、

衣服たち縫に忌日

小笠原折形之図

がある。

刊記は甲本と同じである。

四、翻刻

以下、甲本の「百人一首」「女大学」「三十六人歌仙」を翻刻する。濁点等不明な点は乙本で補った。

天智天皇

秋の田のかりほの庵の笥をあらみ我ころも手は露にぬれつ、
持統天皇

春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山

柿本人麿

あし曳の山鳥の尾のしだりををながし夜をひとりかもねん
山辺赤人

田子の浦に打出て見れば白妙のふじの高根に雪はふりつゝ
猿丸太夫

奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿の声きくときぞ秋はかなしき
中納言家持

かさゝぎの渡せる橋にをく霜のしろきをみれば夜ぞ更にける
安倍仲磨

天の原ふりさけ見れば春日なるみかさの山に出し月かも
喜撰法師

我いほは都のたつみしかぞすむよをうち山と人はいふなり
小野小町

花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふる詠せしみに
蟬丸

これやこのゆくも帰るも別れては知るもしらぬもあふ坂の関
参議筆

和田の原八十嶋かけてこぎ出ぬと人にはつげよ海人の釣船
僧正遍昭

天津風雲のかよひ路吹とちよ乙女のすがたしはしとぐめむ
陽成院

筑羽根の峯よりおつるみなのか恋ぞつもりて淵となりぬる
河原左大臣

みちのくのしのぶもち摺誰ゆへに乱れ初に我ならなくに
光孝天皇

君がため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ
中納言行平

立別れいなばの山の峯におふる松としきかば今帰りこん

在原業平朝臣

千早振神代もきかずたつた川から紅に水くぐるとは
藤原敏行朝臣

住の江のきしによる波よるさへや夢のかよひ路人目よくらむ
伊勢

難波がたみじかき芦のふしのまもあはで此世を過してよとや
元良親王

侘ぬれば今はたおなじなにはなる身をつくしてもあはむとぞおもふ
素性法師

今こんといひしばらくりに長月の有明の月を待出つるかな
文屋康秀

吹からに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしといふらん
大江千里

月見れば千々に物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど
菅家

此たびはぬさも取敢ず手向山もみちの錦神のまに
三条右大臣

名にしおはゞあふさか山のさねかつら人にしられでくるよしもがな
貞信公

小倉山みねの紅葉は心あらば今一たびの御幸またなん
中納言兼輔

みかの原わきてながるゝ泉川いづみきとてかこひしかるらん
源宗于朝臣

山ざとは冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば
凡河内躬恒

こゝろあてにあらばやおらんはつ霜のをきまどはせるしら菊のはな
壬生忠岑

有明のつれなく見えし別れよりあかつきばかりうきものはなし

坂上是則
さかのへこれのり

朝ぼらけ有明の月とみるまでに芳野のさとにふれるしら雪
あさけ ありあけ
はるのつぎ
春道列樹
やまがわ

山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬもみぢ成けり
きのことのり
紀友則

久かたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらん
ふちはのちきかせ
藤原興風

誰をかも知る人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに
きのつらゆき
紀貫之

人はいざこゝろもしらず古郷は花ぞむかしの香にほひける
きよはらのふかやふ
清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいつこに月やどるらむ
なつ よ
ふんやのあさやす
文屋朝康

しら露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散ける
つゆ かぜ ふき
うこん
右近

忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命のをしくも有哉
わす る おも おも
さん ぎつし
参議等

浅ぢふのをのゝ篠原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき
あさ ぢふの のの しのはら
たいらのかねもり
平兼盛

忍ぶれど色に出にけり我こひは物やおもふと人のとふまで
しのぶれど いろ いで けり わが こひ は 物 や おもふ と 人 の と ぶ ま で
み ぶのたぐみ
壬生忠見

恋すてふ我名はまだき立にけり人しれずこそおもひそめしが
こひ わが な たち
きよはらのもとすけ
清原元輔

ちぎりきなかたみに袖をしぼりつゝ木のまつ山浪こさじとは
ちうな こんあたたて
中納言敦忠

逢見ての後の心にくらぶれはむかしは物をおもはざりけり
あひ ちうな こんあたたて
中納言朝忠

あふ事の絶てしなくは中へに人をも身をもうらみざらまし
あふ こと たえ なく
に 人 を も 身 を も うら み ざら まし

謙徳公
けんとくこう

哀ともいふべき人はおもほえて身のいたづらになりぬべきかな
あはれ
曾禰好忠
そねのよしただ

由良の戸をわたる船人かちをたえ行衛もしらぬ恋の道かな
ゆら と
あけつこうし
惠慶法師

八重律茂れるやどの淋しきに人こそ見えね秋はきにけり
やえむらたけ
みなものしげゆき
源重之

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくだけて物をおもふ比かな
かぜ
おはなからみよしのぶ
大中臣能宣朝臣

御かきもり衛士のたく火の夜はもえひるは消つゝ物をこそおもへ
み かき もり へい しの たく ひの よは もえ ひる は けふ づつ 物 を こそ おも へ
おはらのよしなか
藤原義孝

君が為おしからざりし命さへながくもがなとおもひけるかな
きみ ため
ふちはのさねかたあそん
藤原実方朝臣

かくとだにえやはいふきのさしもぐささしもしらじなもゆるおもひを
かくはらのみちのぶあそん
藤原道信朝臣

明ぬればくるゝ物とは知りながらなをうらめしきあさぼらけかな
あけ
うだいしやうちつなのは
右大将道綱母

歎きつゝひとりぬる夜のおくるまはいかに久しきものとかはしる
なげ
きとうさんののは
儀同三司母

忘れじの行すゑまではかたければふを限りの命ともがな
わすれ じの けいすゑ までは かた ければ ふを けり の 命 と も が な
だい な こんきんたう
大納言公任

滝の音はたえて久しく成ぬれど名こそながれて猶きこへけれ
たき おと
いづみしきぶ
和泉式部

あらざらむこの世の外のおもひ出に今一たびの逢こともがな
むらさきしきぶ
紫式部

めぐりあひて見しやそれとも分ぬまに雲隠れにし夜半の月かな
だいにのさんみ
大式三位

有馬山ゐなのさゝ原風吹ばいでそよ人を忘れやはする
ありまやま
はしかぜか
有馬山ゐなのさゝ原風吹ばいでそよ人を忘れやはする

赤染衛門

やすらはで寝なまし物をさよ更てかたふくまでの月を見しかな

小式部内侍

大江山幾野のみちのとをければまだふみも見ず天の橋立

伊勢大輔

古しへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな

清少納言

夜をこめて鳥の空音ははかるともよにあふさかの関はゆるさじ

左京大夫道雅

今はたゞおもひ絶なんとはかりを人伝ならでいふよしもがな

権中納言定頼

朝ぼらけ宇治の川霧たえゝに顕れわたる瀬々の網代木

相模

うらみわびほさぬ袖だに有ものを恋にくちなん名こそおしけれ

前大僧正行尊

もろともに哀とおもへ山桜花より外にしる人もなし

周防内侍

春の夜の夢ばかりなるたまくらにかひなくたゝん名こそおしけれ

三条院

こゝろにもあらで浮世にながらへばこひしかるべき夜半の月かな

能因法師

あらし吹三室の山の紅葉はたつたの河のにしき成けり

良運法師

淋しさに宿を立出て眺ればいつこもおなじあきの夕暮

大納言経信

夕されは門田のいなば音信であしのまろやに秋風ぞふく

祐子内親王家紀伊

音に聞たかしの浜のあだ浪はかけしや袖のぬれもこそすれ

前中納言匡房

高砂の尾上のさくら咲にけりとやまのかすみたゝずもあらなん

源 俊頼朝臣

うかりける人を初瀬の山おろしはげしかれとはいのらぬものを

藤原基俊

契りをきしさせもが露を命にて哀ことしの秋もいぬめり

法性寺入道前関白大臣

和田のはら漕出て見れば久かたの雲井にまがふおきつしらなみ

崇徳院

瀬を早み岩にせかるゝ滝川のわれてもすゑにあはんとぞおもふ

源 兼昌

淡路島かよふ千鳥のなく声に幾夜寝ざめぬすまの関もり

左京大夫顕輔

秋風にたなびく雲のたえまよりもれ出る月の影のさやけさ

待賢門院堀川

ながゝらむ心もしらず黒髪のみだれてけさは物をこそおもへ

後徳大寺左大臣

ほとゝぎす鳴つるかたをながむればたゞ有明の月ぞ残れる

道因法師

おもひ侘さても命は有ものをうきに絶ぬはなみだなりけり

皇太后宮太夫俊成

世の中よ道こそなけれ思ひる山のをくにも鹿ぞ鳴なる

藤原清輔朝臣

ながらへばまたこの比やしのばれんうしとみしよぞ今はこひしき

俊恵法師

夜もすがら物おもふ比は明やらで寝屋のひまさへつれなかりけり

西行法師

なげゝとて月やは物をおもはするかこちがほなるわが涙かな

寂蓮法師
じやくれんほうし

むら雨の露もまだひぬ槇の葉に霧たちのぼるあきの夕暮
くはうもんぐわのつたう

皇嘉門院別当
くわがもんゐんべつたう

難波江のあしのかりねの一夜ゆへ身をつくしてやこひわたるべき
なにはえ

式子内親王
しきうないしんわう

玉の緒よ絶なばたえねながらへば忍ぶることのよはりもぞする
たまを

殷富門院大輔
いんふもんゐんたいふ

見せばやなをじまのあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず
みせばやなをじまのあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず

後京極摂政前太政大臣
ごきやうごくせつぜいぜんたいていだいじん

蛭なくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん
むさなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん

二条院讃岐
にじょうゐんさんき

我袖はしほひに見えぬ沖の石の人こそしらねかはくまもなし
わがそで

鎌倉右大臣
かまくらうだいじん

世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟のつなでかなしも
よなか

参議雅経
さんぎまさつね

みよし野の山のあき風小夜更てふるさと寒くころもうつなり
みよし野の山のあき風小夜更てふるさと寒くころもうつなり

前大僧正慈円
ぜんだいそうじじあん

おほけなくうき世の民におほふかな我たつ袖に墨ぞめの袖
おほけなくうき世の民におほふかな我たつ袖に墨ぞめの袖

入道前大政大臣
にうだうきさきのだいじやうだいじん

花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくものは我身成けり
はなさそふあらしの庭の雪ならでふりゆくものは我身成けり

権中納言定家
こんちゅうなごんさだいえ

こぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつゝ
こぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつゝ

正三位家隆
せいさんゐいけあき

風そよぐならの小川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるし成ける
かぜそよぐならの小川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるし成ける

後鳥羽院
ごとよあき

人もおし人もうらめしあぢきなく世をおもふ故に物おもふ身は
人もおし人もうらめしあぢきなく世をおもふ故に物おもふ身は

順徳院
じゆんてくゐん

百敷やふるき軒端の忍ぶにもなをあまりあるむかし成けり
もへしきやふるき軒端の忍ぶにもなをあまりあるむかし成けり

女大学
をんなだいがく

一夫女子は成長して他人の家へ行舅姑に仕るものなれば男子よりも親の教ゆる
それによし
かせにすべからず父母寵愛して恣に育めれば夫の家に於て必氣随にて夫
るかせにすべからず父母寵愛して恣に育めれば夫の家に於て必氣随にて夫
に疎まれ又は舅の誨正しければ難堪思ひ舅を恨非り中悪くなりて終には追出さ
れ恥を曝す女子の父母我訓なき事を謂ずして舅夫の悪きとのみおもふは誤なり
是皆女子の親のをしへなきゆへなり

一女は容よりも心の勝れるを善とすべし心緒無美女は心騒しく眼恐しく見
いだし
出して人を怒り言葉句に物いひさがなく口誓て人に先立人を恨嫉み我身に誇り
人を誇笑われ人に勝り顔なるはみな女の道に違なり女は唯和ぎ順ひて貞信に
情深く静なるをよしとす

一女子は稚時より男女の別を正しくして仮初にも戯たることを見聞しむべから
いによし
ず古しへの礼に男女は席を同じくせず衣裳をも同じ処に置ずおなじ処にて浴せ
ず物を請取わたすことも手より手へ直にせず夜ゆくときは必燭を燈てゆくべし
他人はいふに及ばず夫婦兄弟にても別を正しくすべしとなり今時の民家は此様の法
を知らずして行規を乱にして名を穢し親兄弟に辱をあたへ一生身を空にする
者有口惜き事にあらずや女は父母の命と媒妁とにあらされば交らず親まずと
小学にも見へたり仮令命を失ふとも心を金石のごとくに堅して義を守るべし

一婦人は夫の家をわが家とする故に唐土には嫁を帰るといふ我家にかへるとい
ふ事なり仮令夫の家貧賤なりとも夫を怨べからず天よりわれにあたへ給へる家
の貧は我仕合の凶ゆへなりとおもひ一度嫁しては其家を出さるを女の道とする
こと古しへ聖人の訓なり若女の道にそむき去るゝ時は一生の恥なりされば婦人に
七去とて悪きこと七あり一には嬖に順ざる女は去べし二には子なき女は去べし
是妻を娶は子孫相続の爲なれば也然れども婦人の心正しく行儀よくして妬こゝ
ろなくばさらすとも同姓の子を養ふべし或は妾に子あらば妻に子なくとも去に
及ばず三には淫乱なればさる四には格氣ぶかければさる五に癩病などの悪き疾有
はさる六に多言にて慎なく物いひ過は親類とも中悪くなり家みだるゝものなれ
ば去べし七には物を盗む心あるをさる此七去は皆聖人の教なり女は一度嫁して
其家を出されては仮令再び富貴なる夫に嫁すとも女の道にたがひて大なる辱な

り

一女子はわが家にありては我父母に専孝を行ふ理なりされとも夫の家に
は専嬢をわが親よりも重んじて厚く愛しみ敬ひ孝行を尽すべし親の方を重
舅の方を軽することなかれ嬢の方の朝夕の見まひを闕べからず嬢の方の勤へき
業を怠るべからず若嬢の命あらば慎行て背べからず万のこと舅姑に問てその
教に任すべし舅姑もし我を憎み誹給ふとも怒恨することなかれ孝をつくして誠
をもつてつかゆれば後はかならず中好なるもの也

一婦人は別に主君なし夫を主人と思ひ敬ひ慎て事べし軽しめ侮るべからず物じ
て婦人の道は人に従ふにあり夫に對するに顔色言葉つかひ慇懃に謙和順な
るべし不順にして不順なるべからず奢て無礼なるべからずこれ女子第一の勤な
り夫の教訓あらば其仰を叛べからず疑はしきことは夫に問て其下知に随ふへ
し夫問ことあらは正しく答ふへし其返答疎なるは無礼なり夫若腹立怒ときは恐
れて順ふべし怒諍てその心に逆べからず女は夫をもつて天とす返も
夫に逆ひて天の罰を受べからず

一兄公女公は夫の兄弟なれば敬べし夫の親類に誘れ憎まれるは舅姑の心に
戻て我身の為には宜しからず睦しくすれば嬢の心にも協ふ又嬢を親しみ穆敷
すべし殊更夫の兄嫂は厚くやまふべし我昆姉と同じくすべし

一嫉妬の心努め発すべからず男姪乱ならば諫べし怒怨べからず姑甚ければ
其気色こと葉も恐敷冷しくして却而夫に疎まれ見限らるゝものなり若夫不義
過有ばわが色を和らげ声を雅にして諫べし諫を聴ずして怒らばまず暫く止て
後に夫の心和たる時復諫べし必気色を暴くしこゑをいらゝけて夫に逆ひ叛こ
となかれ

一言語を慎て多くすべからず仮にも人を誹り偽を言べからず人の謗を聞くことあ
らば心に修て人に伝へ語るべからず訕をいゝつたふるより親類とも問悪くなり家
の内おさまらず

一女は常に心遣して其身を堅く謹み護るべし朝は早く起夜は遅く寢屋はいねず
していへの内の事に心を用ひ織縫績緝怠るべからずまた茶酒など多く吞べからず
歌舞妓小歌浄瑠璃などの淫れたる事を見きくべからず宮寺など都て人の多くあつ

まるところへ四十歳より内は余りに行へからず

一巫覡などのことに迷ひて神仏を汚し近づき猥に祈るべからず只人間の勤をよ
くする時は禱らずとも神仏は守給ふべし

一人の妻となりてその家をよく保べし妻の行ひ悪く放埒なれば家を破る万事俟
にして費を作べからず衣服飲食なども身の分限にしたがひ用て奢ることなかれ

一若きときは夫の親類友達下部等の若き男には打解たる物がたり近付べからず男
女の隔を固すべし如何なる用有とも若男に文など通はすべからず

一身の莊も衣裳の染いろ模様なども目にたゝぬやうにすへし身と衣服との穢す
して潔なるはよし勝て清を尽し人の目に立ほなるは悪し只わが身に應じたる
を用ゆべし

一我郷の親の方に私し夫の方の親類を次にすべからず正月節句などにも先
夫の方を勤て次に我親の方をつとむべし夫の許さるには何かたへも行べからず
私に人に饋ものすべからず

一女は我親の家をば統す舅姑の跡を継ゆへにわが親よりも嬢を大切に思ひ孝行
を為べし嫁して後はわが親の家にゆく事も希なるべし増て他の家へは大形は使を
遣はして音問をなすべし又我親郷のよきことを修て讃かたるべからず

一下部余多めしつかふことを万の事自辛勞を忍て勤ること女の作法なり舅姑
の為に衣を縫食を調へ夫に仕へて衣を畳席を掃子を育汚を洗常に家の内に
居て猥に外へ出べからず

一下女をつかふに心をもちゆべし云甲斐なき下臈は習し悪くて智恵なく心奸敷物
いふこと様なし夫のこと舅姑嬢のすることと我心に合ぬ事あれば猥に讒聞せて
それを却て君の為と思へり婦人もし智恵なくしてこれを信じては必恨み出来安
し元來夫の家はみな他人なれ恨み叛きて恩愛を捨ること安し構て下女の詞を信
じて大切なる姑嬢の親を薄くすべからず若下女勝れて多言くて悪き者ならば

早く追出すべしケ様の者は必ず親類の中をも云さまたげ家を乱す基となるものな
り恐るべし又卑き者を使には氣に合ざること多それを怒り罵て止ざれば約敷
腹立こと多くして家の内静ならず悪き事あらば折云教て誤を直すべし少の

過は忍て怒るべからず心の内にはあはれみて外には行規を固訓て怠らぬ様

につかふべし与へ恵べき事有は財を惜べからず但我氣に入るとて用にも立ぬ
者にみたりに与べからず

一凡婦人の心様の悪き病は和き順ざると怒恨と人を誘ると物妬と智恵浅き
となり此五疾は十人に七八は必あり是婦人の男に及ばざるところなり自顧

戒て改去べし中にも智恵の浅ゆへに五の疾も発る女は陰性なり陰は夜にて
暗し所以女は男に比るに愚にて目前なる可然ことをも知らず又人の誹るべきこ
とをも弁へずわが夫我子の災と成べき事をも知らず科もなき人を怨み怒詛詛あ

るひは人をねたみてわが身ひとり立んとおもへど人に憎まれ疎まれてみな我身の仇
となることを知らず最はかなく浅猿し子を育れども愛に溺れて習はせ悪し斯愚な
る故に何事も我身を謙て夫に従ふべし占の法に女子を産は三日床の下に臥し

むるといへりこれも男は天に仮女は地に象るゆゑに万のことにつきても夫を先
立我身を後にし我なせることに能ことありとて誇るころなく亦惡こと有て人

に云るゝ逆も諍はすして早くあやまちをあらため重て人に謂れざるやうに我身を
つゝし又人に侮れてもはらち憤る事なく能堪て物をおそれ慎べし如斯心得

なば夫婦の中おのづから和らぎ行すゑなく連そひて家の内穩かなるべし
右之条々稚なき時よりよく訓べし又書付て折し読しめ忘ること無からしめよ今

代の人女子に衣服道具などおほく与て婚姻せしむるよりも此条々を能をしふること
と一生身を保宝なるべし古語に人よく百万錢を出して女子を嫁せしむること
を知て十万錢を出して子ををしふることを知らずといへり誠なるかな女子の親た

人此理を知すんば有べからず

益軒貝原先生述

三十六人歌仙

左 柿本人麿

右 紀貫之

桜ちる木のした風はさむからて空にしられぬゆきぞふりける
左 凡河内躬恒

いづくとも春のひかりはわかになくまだみよしの山は雪ふる
右 山部赤人

和歌のうらにしほみちくればかたを浪あしべをさして田鶴なきわたる
左 中納言家持

春の野にあさるきぐすのつま恋におのがありかを人にしれつゝ
右 伊勢

三輪の山いかにまち見んとしふともたづぬる人はあらじとぞ思ふ
左 在原業平朝臣

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
右 僧正遍昭

たらちねはかゝれとてしもうばたまの我くろかみはなですや有けん
左 素性法師

みわたせば柳桜をこきまぜて都ぞはるのにしき成けり
右 紀友則

ゆふざればさほのかはらの川かぜに友まどはして千鳥なくなり
左 猿丸大夫

遠近のたつきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶ鳥かな
右 小野小町

侘ぬれば身をうきくさのねをたへてさそふ水あらばいなんとぞおもふ
左 中納言兼輔

みじか夜のふけ行まゝに高砂のみの松風ふくかとぞきく
右 中納言朝忠

逢事のたえてしなくは中ゝにひとをも身をもうらみざらまし
左 中納言敦忠

伊勢のかみ千尋のはまにひろふとも今はなにてふかひか有べき
右 藤原高光

かくばかりへがたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな
左 源公忠朝臣

ゆきやらで山路くらしつ郭公今一声のきかまほしさに

右 壬生忠岑

子の日するのべに小松のなかりせば千代のためしに何をひかまし

左 斎宮女御

琴の音に岑の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけん

右 大中臣頼基

ひとふしに千代をこめたる杖なればつくともつきじ君がよはひは

左 藤原敏行朝臣

秋きぬとめにはさやかに見えねとも風の音にぞおどろかれぬる

右 源重之

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくだけて物を思ふころかな

左 源宗于朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

右 源信明朝臣

こひしさはおなじ心にあらずとも今宵の月を君見さらめや

左 藤原清正

天津風ふけるの浦にゐるたづのなか雲井に帰らざるべき

右 源順

水のおもにてる月なみをかぞふればこよひぞ秋の最中なりける

左 藤原興風

たれをかもしる人にせむ高砂のまつもむかしの友ならなくに

右 清原元輔

秋の野のはぎの錦をふるさにしかの音ながらうつしてがな

坂上是則

みよしのゝ山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり

藤原元真

咲にけりわが山ざとのうの花はかきねにきへぬ雪とみるまで

左 三条院女藏人左近

岩はしのよるのちぎりも絶ぬべしあくるわびしきかづらきのかみ

右 藤原仲文

有明の月のひかりをまつほどにわがよのいたくふけにけるかな

左 大中臣能宣

千年までかぎれる松もけふよりは君にひかれてよろづ代やへん

右 壬生忠見

やかずともくさはもへなんかすが野をたゞ春の日にまかせたらなん

左 平兼盛

暮てゆく秋のかたみにをくものはわかもとゆひの霜にぞありける

右 中務

秋かぜの吹につけてもとはぬかなおきのはならば音はしてまし

Introduction “Naniwa Hyakuninisshu Wasuregai”

KIKUCHI Shinichi

Abstract : This paper introduces “Naniwa Hyakunin'isshu Wasuregai”. It is one of the books related to Hyakunin'isshu.